

た乗用型のため、身体への負担も少ない。以上のことから、WEEDMANは水稲における有機栽培の普及に貢献できると考えている。

令和2年時点における日本の有機農業の取組面積は全耕地面積の約0.6% (25,200ha) (農林水産省 令和4年7月より) となっており、対象となる水田除草機の市場規模はさらに限定的である。しかし、それは新しい技術で変えることができると考えている。新しい技術で生産者、消費者の選択肢が増えそれがお互いに望むものであれば徐々に普及していくと考える。

当社では有機・無農薬栽培、慣行裁

培問わず実演デモを行っている。ぜひお近くの農機販売店にお問い合わせ頂き、除草能力を実際にご確認頂きたい。

おわりに

現在、世界的にSDGsが掲げられ生産活動においてはサステナブルな方法への転換が急速に求められている状況である。農業においてはその一つが環境負荷の低減に寄与する有機農業である。今後、WEEDMANが有機農業拡大及び有機農産物普及の一助になれば幸いである。

最後に WEEDMAN は開発に協力

頂いた生産者の存在があつてこそ実現した除草機であるといえる。収量減等のリスクがありながらも惜しめない協力を頂いた全国各地の生産者の方々に感謝を申し上げる次第である。

引用文献

- 滋賀県 2021年3月「オーガニック近江米」の手引き
農林水産省 令和2年9月 有機農業をめぐる事情
農林水産省 令和元年8月 有機農業をめぐる事情
農林水産省 令和4年7月 有機農業をめぐる事情

田畑の草種

雀の帷子 (スズメノカタビラ)

(公財)日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

日本の五大昔話の一つに「舌切り雀」がある。原型は宇治拾遺物語の「腰折れ雀」にあるとされているが、昔話としてはいくつものあらすじがあり、おおよそは次のような話である。

あるところにお爺さんとお婆さんが住んでいた。ある時、お爺さんはケガをした雀を家に連れて帰り看病する。元気になった雀は、ある日、お婆さんが作った大事な洗濯糊を食べてしまった。怒ったお婆さんは、お爺さんがいない間に雀の舌を切って家から追い出してしまふ。

家に帰ってきたお爺さんは、家を追い出された雀を探し回り雀のお宿にたどり着く。お爺さんはそこで歓待を受け、帰りに大きな葛籠か小さな葛籠か持ち帰るように言われて、年寄りだからと小さな葛籠を持ち帰る。家に帰って葛籠を開けると中には宝物が詰まっていた。

これを見てお婆さんも雀の宿に押しかけて、強引に大きな葛籠を持ち帰る。途中で開けてはダメだといわれながらもお婆さんは途中で葛籠を開けてしまうと、中には蛇や毒虫が入っていた。

このお話は、「欲張ったり無慈悲なことをしたりするもので

はない」との教訓みたいなものにつながっていくのだが、問題はそこではなくて、この時お婆さんが作っていた糊は、お爺さんや自分、そしておそらくこの雀のための新しい「帷子」を作るため、古着を洗い張りするための糊だった、ということである。だからお婆さんは怒ってしまった。

スズメノカタビラはイネ科イチゴツナギ属の一年草～越年草。全国の道端、畑、空き地などの人里に生育する代表的な草種。やや湿った所を好み、田植前の田んぼでは一面に出ることもある。背丈は5cm～30cm、株全体が黄緑色で柔らかい。葉は長さ4cm～10cmの線形で、先端が舟形になり尖る。これはイチゴツナギ属の特徴。花序は円錐花序で通年出穂するが、主に春から初夏に開花する。小穂は卵形、長さ3mm～5mm、ときに紫色を帯びる。葉鞘や護穎の縁が薄い透明な膜質で、重なり合ったところが単衣の着物の胸元を思わせるところから名づけられた。

悔い改めたお婆さんは、この雀のために改めて「スズメノカタビラ」を作ってやった、ということである。